

(2) 3つの登校風景

加藤が通った登校路を1925年当時の地図と照合して、現在の道路で確認したくとも、区画整理が進んだらしく判然としない。しかし、『羊の歌』のなかで登校風景として、加藤は3つを描いている。ひとつは長井邸の金網、ひとつは金王八幡神社、そして桜横町である。

(下地図は1925年頃の渋谷町の地図、鷺巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』岩波書店、2018、精興社提供)



ひとつめは長井邸の金網である。長井邸とは近代薬学の祖といわれる長井長義の一万坪を超えたといわれる大邸宅である（現在長井ビルの建つあたりである）。敷地は金網で囲まれていた。その広大な敷地には、日本と外交関係を結んで間もないフィンランド公使館があり、そ

こには外交官とその家族が暮らしていた。その金網は高いものではなかったが、それを誰も乗り越えようとはしなかった。暗黙のうちに拒絶されていたのだった。「異国の子供たち」は「私たちを見たことがなかった。彼らにとって私たちは存在しなかった」。金網だけで隔てられたふたつの世界は、決して交わることがない、それぞれ別の世界だった。

しかし、この経験は長井邸の金網が初めてではなかった。祖父増田熊六の邸と熊六の家作の長屋とを隔てていた生籬と石垣にも似たような感覚を覚えた。

長屋の人々——戸口のまえで赤ん坊をあやしている婦人や、道で石けりをしている私たちと同じ年頃の子供たちは、私たちとは別の世界に住んでいて、目と鼻の先にいながら何らの交渉もなかったし、そもそも交渉の可能性の想像もできないような人々であった。(中略)深い関係があつて、しかも全く関係のない人々の存在は、私の解釈することのできないものであり、総じて明るく澄んだ私の空にのこされた大きな暗点であったといえるだろう。祖父の家に行くたびに、長屋の人々をなるべく見ないようにする習性を、私はいつのまにか身につけていた。(『羊の歌』「祖父の家」)

長井邸の金網と祖父熊六邸の生籬は、社会のありようというものの、その社会のなかで加藤が占めている位置を、加藤に教えた重要な契機であつたに違いない。

ふたつ目は金王八幡神社である。神社の位置は当時も今も変わっていない。学校の行き帰りに八幡神社の境内を通り抜けた。そこでは子どもたちが、野球や相撲、メンコや独楽に興じていた。「教室では、国定読本を自由自在に読む子供が尊重されて、「メンコ」に習熟した子供は小さくなっていた。八幡宮の境内では、「メンコ」の上手な子供が周囲に号令して、

国定読本を読む能力には一文の値打ちもなかった。私はどちらかを択ばなければならなかった」。加藤が択んだのは後者であり、そのことは、父信一の意味とは違って、町の子どもたちと交わることはほとんどできない、ということの意味した。(下写真：金王八幡の境内の桜風景)

みつつ目は金王八幡神社から学校への道にあった桜並木(桜横町)である。桜横町がどこだったかは今日では確定できない。桜横町には、同じ学校に通う大柄で、華やかで、女王



のように振舞う、美しい少女が住んでいた。加藤はこの「花の女王」に憧れた。この少女に会わないと「いくらかの失望」を感じざるを得なかった。加藤は長ずるに及んでも「花の女王」を忘れられず、桜横町を訪れている。『青春ノート』には「小学一年で恋を知った」と綴り、「さくら横ちよう」という詩を詠んだ。しかし、それが「初恋」だったとはいえないだろう。だが「その頃の私を、またおそらくその後の私の多くをさえも、よく説明している経験には違いなかった」と述べる。

桜横町は憧れの少女と結びついているだけではなかった。「メンコ」を択ばずに「国定読本」を採った加藤は、学校が行なう進学のための「補習授業」に出た。その帰り道、桜横町を通ると、夕食の支度の匂い、家々の窓に点しはじめた灯が映るさま、「葉の落ちた桜の枝が暮れ残る空に拡げる細かい網の目」の微妙な美しさを発見するのである。「桜横町の灯と

もし頃を、かぎりなく愛する」のだった。その後加藤は、パリのヴァルミー河岸をはじめとして、あちこちで枯れ枝と夕暮れの空が織りなす美しさに感動し、それをしばしば文に綴っている。